さかい・ただよし――昭和10年京都府生まれ。島根大学教育学部卒。32年より中学校・高等学校に教員として勤務しながら、山陰地方の民話やわらべ歌の収集を始める。島根大学教授、島取短期大学教授などを歴任。現在はオンラインツールを活用した民話・わらべ歌に関するオンライン講座を開催している。著書に『島根の民話』『QRコードで聴く 島根の民謡・労作歌』『QRコードで聴く 島根のわらべ歌』(いずれも今井印版)など多数。©朝日新聞社

生涯現役

第13回

90歳

縁を生かす

島根大学法文学部元教授 酒井董美

六十年以上にわたって主に山陰地方の民話やわらべ歌を収集・研究してきた酒井董美氏。九十歳のいまもオンライン講座で全国の方々に民話の素晴らしさを伝承し続けている酒井氏の歩みには、健康長寿の秘訣、出会いを生かし人生をひらく要諦が詰まっている。

取材は二〇二四年十二月、東京都と島根県をオンラインツールで繋いで行われた。

健康の秘訣は仕事をすること

――六十年以上にわたり、山陰地方の民話やわらべ歌を収集・研究してこられた酒井さんは、九十歳を迎えるいまなお、オンラインツールを自在に駆使してその魅力を発信なさっているそうですね。

酒井 Zoomを使ったオンライン講座は、自宅の一室をミニ放送局にして、いまは毎週月曜日の夜八時からの「雑談会」、この九月に始まった「第六回山陰の民話、わらべ歌ミニオンライン講座」を開催しています。

特に「ミニオンライン講座」には東京、千葉、埼玉、奈良、福井、兵庫、広島、島根、山口、大阪、福岡など全国から約三十名が参加してくださっていて、年齢も四十代から七十代まで様々です。仕事で都合が悪い人のために、朝と夜の二部制にしていますが、両方受講される方もいます。講義は同じでも質疑応答は変わってきますから、そこが面白いようですね。

あと、やむなく欠席された方には、後から必ず録画をお送りしています。講座は事前振り込みで一回の受講が百円ですけれども、やっぱり、お金をいただいている以上は、欠席者にもその分をお返しするのが当然だと思うんです。

――皆さんは、民話のどこに魅力を感じて受講されるのですか。

酒井 民話は同じ系統の話であっても、地域によって様々なバージョンがあるんですよ。例えば、有名な「桃太郎」は、誰もが鬼に立ち向かう勇ましい姿を想像するかと思いますが、ある地域では、鬼

（『致知』二〇二五年二月号お一一〇～一一二ページに掲載されています）

酒井氏の話に熱心に耳を傾ける留学生。日本の民話やわらべ歌は世界の人々の心にも訴えかける力を持っている（島根大学教授時代、酒井氏の研究室にて）

ヶ島に向かうまで全く怠け者の桃太郎が登場します。そうした民話が持つ地方色に魅力を感じてくださっているのかもしれません。

――こうしてオンラインでお話ししていても全く年齢を感じませんが、健康長寿のために、特に意識していることはございますか。

酒井　私は早寝早起きで、朝は五時起床、夜寝るのは十時です。これを続けてきたことが一つ。あとは暴飲暴食をしないことですね。戦時中はろくに食べるものがありませんでしたから、いまの食事はどんなものでもおいしく食べられますし、少量で満足なんです。

それに私はジョギングなどの運動はしない代わりに、ほぼ毎日原稿を書いています。原稿を書くのが趣味のようなもので、好きなクラシック音楽を聴きながら原稿に没頭していくんです。まあ、これが一番の健康法かもしれない。

――仕事が元気の秘訣だと。

酒井　私のいる部屋の棚にあるのは、これまで地域の方々から収集した民話やわらべ歌を録音したテープです。一万点くらいあります。ただそれらをいまの人たちに聴いてもらう、知ってもらうためには活字化、本にまとめて出版するだけでは不十分だと思うんですよ。

ですから、私の民話の本や担当している地元紙の連載にはQRコードがついていて、それをスマートフォンで読み取ると、収集した民話やわらべ歌が伝承者の声で聴けるようになっているんです。以前、読者の方が私の連載を読みQRコードで音声を聴いたところ、その声が何と亡くなった父親だった、声を聴けてとても嬉しかった、と投書されていました。これからは文明の利器を使い、民話も音声で立体的に訴えていく時代なんだと改めて感じましたし、もっと文明の進化を利用していかねばならないと思っています。

「教師は赴任した地域に溶け込むべきである」

――酒井さんが民話研究の道に進んだいきさつをお話しください。

酒井　私は昭和十年、京都で生まれたのですが、その後、地方公務員だった父の仕事の都合で和歌山に引っ越し、まもなく大阪に移って当時の国民学校で学びました。両親からは「人には正直、親切にしなさい」「嘘はついてはいけない」とよく言われていました。

その中で昭和二十年に、アメリカ軍の空襲を経験したんです。

当時、二階建ての一軒家に住んでいたのですが、二階にいた祖母が「あっちが燃えてる！　こっちが燃えてる！」って叫び声を上げるものだから、びっくりした私たちは防空頭巾を引っ張り出して防空壕に逃げることにしました。そして玄関を出ると、家の敷地内に焼夷弾が落っこちて、パチパチ燃えている。それを何とか潜り抜けて近所の防空壕まで避難しました。

防空壕には幼い弟も一緒に避難したのですが、爆撃を受けて近くの建物が燃え上がっている光景を見て、「怖いけど、美しいなぁ」と言ったんですよ。この弟の言葉はいまだに記憶に残っています。

それでこのままじゃ危ない、「命あっての物種」だと、父の故郷の島根県に皆で疎開をして、そのまま暮らすことになったんです。

――戦禍を逃れて島根県に。その後はどのように歩んで行かれましたか。

酒井　小学校の担任の先生が本当に優しい方で、私が病気で休んでいる間、お見舞いに来てくれ、子供向けの坪田譲治の本をプレゼントしてくださったんですよ。この先生の印象が心にずっと残っていましてね、大学は島根大学文理学部に進んだのですが、途中で「やっぱり教師になろう」と教育学部に転学部したんです。

そして教育学部では、友人の誘いで、『日本の底辺』の著書で知られる溝上泰子先生の雑談会（水曜会）に参加するようになりました。講義はとらなかったのですが、溝上先生が水曜会で、「教師は赴任した地域に溶け込むべきである」とおっしゃって、大きな感化を受けたんです。この言葉があったからこそ私は民話の世界に入っていったと言ってもよいでしょうね。

――溝上先生の言葉が、民話とどう関係していくのでしょうか。

酒井　国語科と社会科の教員免許を取って卒業した私は、昭和三十二年に三隅町立三隅中学校に赴任したのですが、溝上先生の言葉を受け、地域の資料を生かせば生徒に喜んでもらえる、そのために地域の方々に昔話を聴こうと思ったんです。最初に話を伺ったのは女子生徒の祖母、明治二十五年生まれの山川テルさん。テルさんは若い教師の訪問を本当に喜んでくださって、五、六話の民話を語ってくれました。これが、昭和三十二年一月三十一日のことです。

また、それを生徒たちに聞かせると、喜んでくれてね。逆に生徒のほうからもっと聞かせてと言ってくるもんだから、私も調子に乗って話してしまう。こうして民話収集に没頭していったんです。

――民話はどのように集めていったのですか。

酒井　聞き取りには土日を当て、録音には発売されたばかりの携帯用テープレコーダーを使い、それを自転車やバイクに載せて地域を回りました。ただ、当時のテープレコーダーは一番軽いもので五キロほどあり、道路も舗装されておらずデコボコでしたから、思い切って月賦で自動車を買いました。

その頃は明治生まれのおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいらっしゃってね、積極的に話を聴かせてくれて、録音はどんどん集まっていきました。また、「うちで食べていきなさい」「きょうは泊まっていきなさい」など、随分よくしていただいて楽しかったですね。古きよき時代でした。

縁が人生を導いてくれた

――民話収集を続けていく中で転機となったことはありますか。

酒井　あれは民話収集を始めてからしばらく経った昭和三十五年のことでした。大学時代、六歳違いの講師と学生の関係で兄貴のように慕っていた内藤正中先生と街中でばったりお会いしたんです。

「酒井、いま何しているんだ？」と聞かれたので、「民話やわらべ歌を集めています」と答えたら、『朝日新聞』の支局長の名前をささっと名刺に書いて渡され、そのまま足早に去っていかれたのです。

これがきっかけになって、『朝日新聞』島根版で週二回、「石見のわらべ歌」を連載させていただけることになり、それを読んだ方から「うちにもこんな歌があるから録音しに来てくれ」と連絡が相次ぐと共に、講演依頼や学会への誘いもいただくようになりました。

――偶然の再会から新しい道が開けていったのですね。

酒井　また、松江の工業高校夜間部に転じた平成二年、母校の島根大学のある教授から、「教官として勤める気はないですか」とお電話をいただきましてね。まさか自分が大学でと思いましたが、それまで書いた限りの著作や論文を業績審査に提出したところ、教授陣より遥かに多いと担当者の方もびっくりされて、大学で教えることになったんです。

さらに、平成十九年には所属する学科に新設された大学院の指導教官になり、定年後には内藤正中先生とまた再会、「鳥取短期大学に空きができたから来ないか」とお声がけいただき、そこで六年間教授を務めました。

ですから、一つのことを徹底すればその道は自然に深まり、広がっていくというのが私の実感です。また師の恩、縁というものは本当に有り難いもので、決して忘れてはならないなと思います。

――出会いをよき縁にするには何が一番大事だと思われますか。

酒井　縁は本当に不思議なものですけれども、やっぱり何事にも真面目に誠実に、嘘をつかずにやることではないですか。私は民話でお金儲けをしようという気持ちは全くないんです。録音に行くことで語り手が喜んでくれ、またその民話を聞いた人たちの喜びに繋がってこれまで六十年以上、民話収集、研究に取り組んできたんですよ。

日本の庶民が先祖代々口承してきた民話はまさに「無形民俗文化財」であり、「こうあってほしい」という先人たちの願いの結晶であると思っています。私たちの心を楽しませ豊かにする民話の素晴らしさ、価値をこれからも守り伝えていくべく、生きている限り生涯現役で頑張っていくつもりです。

縁を生かす

島根大学法学部元教授　酒井董美

（リード）

六十年以上にわたって主に山陰地方の民話やわらべ歌を収集・研究してきた酒井董美氏。九十歳のいまもオンライン講座で全国の方々に民話の素晴らしさを伝承し続けている酒井氏の歩みには、健康長寿の秘訣、出会いを生かし人生をひらく要諦が詰まっている。

●酒井董美（さかい・ただよし）

昭和10年京都府生まれ。島根大学教育学部卒。昭和32年より島根県内の中学校・高等学校に教員として勤務しながら、山陰地方の民話やわらべ歌の収集を始める。島根大学教授、鳥取短期大学教授などを歴任。現在はオンラインツールを活用した民話・わらべ歌に関するオンライン講座を開催している。

著書に『島根の民話』『QR コードで聴く 島根の民謡・労作歌』『QR コードで聴く 島根のわらべ歌』（いずれも今井出版）など多数。

取材は二〇二四年十二月、東京都と島根県をオンラインツールで繋いで行われた。

■健康の秘訣は仕事をすること

――六十年以上にわたり、山陰地方の民話やわらべ歌を収集・研究してこられた酒井さんは、九十歳を迎えるいまなお、オンラインツールを自在に駆使してその魅力を発信なさっているそうですね。

酒井　Ｚｏｏｍを使ったオンライン講座は、自宅の一室をミニ放送局にして、いまは毎週月曜日の夜八時からの「雑談会」、今年（二〇二四年）九月に始まった「第六回山陰の民話、わらべ歌ミニオンライン講座」を開催しています。

特に「ミニオンライン講座」には　東京、千葉、埼玉、奈良、福井、兵庫、広島、島根、山口、大阪、福岡など全国から約三十名が参加してくださっていて、年齢も四十代から七十代まで様々。仕事で都合が悪い人のために、朝と夜の二部制にしていますが、両方受講される方もいます。講義は同じでも質疑応答は変わってきますから、そこが面白いようですね。

　あと、やむなく欠席された方には、後から必ず録画をお送りしています。講座は事前振り込みで一回の受講が百円ですけれども、やっぱり、お金をいただいている以上は、欠席者にもその分をお返しするのが当然だと思うんです。

――皆さんは、民話のどこに魅力を感じて受講されるのですか。

酒井　民話は同じ系統の話であっても、地域によって様々なバージョンがあるんですよ。例えば、有名な「桃太郎」は、誰もが鬼に立ち向かう勇ましい姿を想像するかと思いますが、ある地域では、鬼ヶ島に向かうまで全く怠け者の桃太郎が登場します。そうした民話が持つ地方色に魅力を感じてくださっているのかもしれません。

――こうしてオンラインでお話ししていても全く年齢を感じさせませんが、健康のために、特に意識していることはございますか。

酒井　私は早寝早起きで、朝は五時起床、夜寝るのは十時です。これを続けてきたことが一つ。あとは暴飲暴食をしないことですね。戦時中はろくに食べるものがありませんでしたから、いまの食事はどんなものでも美味しく食べられますし、少量で満足なんです。

それに私はジョギングなどの運動はしない代わりに、ほぼ毎日原稿を書いています。原稿を書くのが趣味のようなもので、好きなクラシック音楽を聴きながら原稿に没頭していくんです。まあ、これが一番の健康法かもしれない。

――仕事が元気の秘訣だと。

酒井　私の後ろの棚にあるのはこれまで地域の方々から収集した民話やわらべ歌を録音したテープです。一万点くらいあります。ただそれらをいまの人たちに聴いてもらう、知ってもらうためには活字化、本にまとめて出版するだけでは不十分だと思うんですよ。

ですから、私の民話の本や担当している地元紙の連載にはQRコードがついていて、それをスマートフォンで読み取ると、収集した民話やわらべ歌が伝承者の声で聴けるようになっているんです。以前、読者の方が私の連載を読みQRコードで音声を聴いたところ、その声が何と亡くなった父親だった、声を聴けてとても嬉しかった、と投書されていました。これからは文明の利器を使い、民話も音声で立体的に訴えていく時代なんだと改めて感じましたし、もっと文明の進化を利用していかねばならないと思っています。

■「教師は赴任した地域に溶け込むべきである」

――酒井さんが民話研究の道に進んだいきさつをお話しください。

酒井　私は昭和十年、京都で生まれたのですが、その後、地方公務員だった父の仕事の都合で和歌山に引越し、まもなく大阪に移って当時の国民学校で学びました。両親からは「人には正直、親切にしなさない」「嘘はついてはいけない」とよく言われていました。

その中で昭和二十年に、アメリカ軍の空襲を経験したんです。

当時、二階建ての一軒家に住んでいたのですが、二階にいた祖母が「あっちが燃えてる！　こっちが燃えてる！」って叫び声を上げるものだから、びっくりした私たちは防空頭巾を引っ張り出して防空壕に逃げることにしました。そして玄関を出ると、家の敷地内に焼夷弾が落っこちて、パチパチ燃えている。それを何とか潜り抜けて近所の防空壕まで避難しました。

防空壕には幼い弟も一緒に避難したのですが、爆撃を受けて近くの建物が燃え上がっている光景を見て、「怖いけど、美しいなぁ」と言ったんですよ。この弟の言葉はいまだに記憶に残っています。

――いまの平和な日本では想像もできない凄まじい状況ですね。

酒井　それでこのままじゃ危ない、「命あっての物種」だと、父の故郷の島根県に皆で疎開をして、そのまま暮らすことになったんです。

――それで島根に。その後はどのように歩んで行かれましたか。

酒井　小学校の担任の先生が本当に優しい方で、私が病気で学校を休んでいる間、見舞いに来てくださり、子供向けの坪田譲治の本をプレゼントしてくださったんですよ。この先生の印象が心にずっと残っていましてね、大学は島根大学文理学部に進んだのですが、途中で「やっぱり教師になろう」と教育学部に転学部したんです。

そして教育学部では、友人の誘いで溝上泰子先生の雑談会（水曜会）に参加するようになりました。講義はとらなかったのですが、溝上先生が水曜会で、「教師は赴任した地域に溶け込むべきである」とおっしゃって、大きな感化を受けたんです。この言葉があったからこそ私は民話の世界に入っていったといってもよいでしょうね。

――溝上先生の言葉が、民話とどう関係していくのでしょうか。

酒井　国語科と社会科の免許を取って大学を卒業した私は、昭和三十二年に三隅町立三隅中学校に赴任したのですが、溝上先生の言葉を受け、地域の資料を生かせば生徒に喜んでもらえる、そのために地域の方々に昔話を聴こうと思ったんです。最初に話を伺ったのは女子生徒の祖母、明治二十五年生まれの山川テルさん。テルさんは若い教師の訪問を本当に喜んでくださって、五、六話の民話を語ってくれました。これが、昭和三十二年一月三

十一日のことです。
　また、それを生徒たちに聞かせると、喜んでくれてね。逆に生徒のほうからもっと聞かせてと言ってくるもんだから、私も調子に乗って話してしまう。こうして民話収集に没頭していったんです。
――具体的に、民話はどのように集めていったのですか。
酒井　聞き取りには土日を当て、録音には発売されたばかりの携帯用テープレコーダーを使い、それを自転車やバイクに乗せて地域を回りました。ただ、当時のテープレコーダーは一番軽いもので五キロほどあり、道路も舗装されておらずデコボコでしたから、思い切って月賦で自動車を買いました。
　その頃は明治生まれのおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいらっしゃってね、積極的に話を聴かせてくれて、録音はどんどん集まっていきました。また、「うちで食べていきなさい」「きょうは泊まっていきなさい」など、随分よくしてくれて楽しかったですね。古きよき時代でした。

■縁が人生を導いてくれた

――民話収集を続けていく中で転機となったことはありますか。
酒井　あれは民話収集を始めてからしばらく経った昭和三十五年のことでした。大学時代、六歳違いの講師と学生の関係で兄貴のように慕っていた内藤正中先生と街中でばっかりお会いしたんです。
「酒井、いま何しているんだ？」と聞かれたので、「民話やわらべ歌を集めています」と答えたら、ある新聞社の支局長の名前をささっと名刺に書いて渡され、そのまま足早に去っていかれたのです。
　これがきっかけになって、『朝日新聞』島根版で週二回、「石見のわらべ歌」を連載させていただけることになり、それを読んだ方から「うちにもこんな歌があるから録音しに来てくれ」と連絡が相次ぐと共に、講演依頼や学会への誘いもいただくようになりました。
――偶然の再会から新しい道が開けていったのですね。
酒井　また、松江の工業高校夜間部に転じた平成二年、母校の島根大学のある教授から、「教官として勤める気はないですか」とお電話をいただきましてね。まさか自分が大学でと思いましたが、それまで書いたある限りの著作や論文を業績審査に提出したところ、教授陣より遥かに多いと担当者の方もびっくりされて、大学で教えることになったんです。さらに、平成十九年には所属する学科に新設された大学院の指導教官になり、定年後には内藤正中先生と再会、「鳥取短期大学に空きができたから来ないか」とお声がけいただき、そこで六年間教授を務めました。
　ですから、一つのことを徹底すればその道は自然に深まり、広がっていくというのが私の実感ですし、また師の恩、縁というものは本当に有り難いもので、決して忘れてはならないなと思います。
――出会いをよき縁にするには何が一番大事だと思われますか。
酒井　縁は本当に不思議なものですけれども、やっぱり何事にも真面目に誠実に、嘘をつかずにやることではないですか。私は民話で儲けをしようという気持ちは全くないんです。録音に行くことで語り手が喜んでくれ、またその民話を聞いた人たちの喜びに繋がっていく。それがとにかく嬉しくてこれまで六十年以上、民話収集、研究に取り組んできたんですよ。
　日本の庶民が先祖代々口承してきた民話はまさに「無形民俗文化財」であり、「こうあってほしい」という先人たちの願いの結晶であると思っています。私たちの心を楽しませ豊かにする民話の素晴らしさ価値をこれからも守り伝えていくべく、生きている限り生涯現役で頑張っていくつもりです。